



企業と地域の絆。

日本を代表するハンドボールチーム「大崎OSOL」とその母体の大崎電気工業が、地域の子どもたちに尽力しています。

元

気な声が響く三芳町総合体育館に黄色い小さなボールを手にした赤いTシャツを着た児童たちが、ゴールネットを揺らしていました。活動していたのは「みよし大崎ジュニア」の選手たち。このチームは地元企業の

業と町との連携で結成されました。

電気メーカー日本トップのシエアを誇る大崎電気

どの家庭にもある「電力量計」の日本一のシエアを誇る大崎電気工業が、三芳町にあることをご存知で



みよし大崎ジュニアの選手たち。この中からもしかしたら将来の日本代表選手となる児童がいるかもしれません。



①～④は2015年1月22日に三芳町総合体育館で開催した「大崎OSOL×斗山ベアーズ（韓国）」のエキシビジョンマッチ。試合は20対23で惜しくも敗戦。①ボールを持つ宮崎大輔選手。観客の視線が釘付けになる。②選手たちに声援を送るみよし大崎ジュニアの選手。憧れの選手が目の前で戦う姿を見て応援に力が入る。③④ハンドボールの代名詞である高い跳躍力。まるで空を飛んでいるかのよう。⑤大崎OSOLのマスコット「ヴィーダ」。イタリア語で「生命、人生、活力」。命がけて闘う選手、元気いっぱいに応援をするサポーターをイメージする言葉。

しょうか。大崎電気工業と言えば日本を代表するハンドボールチーム「大崎OSOL」。宮崎大輔選手などを有し、今年の3月には通算3回目となる日本ハンドボールリーグの優勝を成し遂げるなど、輝かしい実績と歴史を持つクラブチーム、大崎OSOL。そのチームから直接指導を受けることができる、夢のような環境が三芳町にはあります。



みよし大崎ジュニア
CAPTAIN
ともとのぶ
青山知睦さん

練習では積極的に声出しをし、チームを鼓舞しています。チームが「勝利」という目標に向かい、一丸となるようにキャプテンとしての責任を感じながら、練習に取り組んでいます。

とても贅沢なチームの誕生

2013年から小学3～6年生を対象に「みよしジュニアハンドボール教室」を開始。指導するのは元オリンピック選手や大崎OSOLのOBなど、豪華なメンバー。ハンドボールの楽しさはもちろん、思いやりの心、諦めずに挑戦することの大切さ、人と人とのつながりなどを学んだり、他校の児童との交流などできる機会としても貴重な教室です。

教室開始の翌年、楽しむから一歩進んで「勝利」をめざす本格的なチーム「みよし大崎ジュニア」が発足し



9月からリーグ戦がスタート。10月22日(土)には県内の和光市総合体育館で試合が行われます。迫力の試合を生で体感してみたいかがでしょうか。

ました。メンバーは小学4～6年生。教室に参加した児童から「もっと上手になりたい」という声を受けて作られたこのチーム。当初は全く勝利に恵まれず、敗戦が続きましたが、昨年初勝利をあげることができました。

地域に恩返しを

「大崎電気では地域に密着した取り組みや、社会貢献を常に考えています。このチームはその一環で、少しでも地域に恩返しができると思います」と話すのは、大崎OSOLのGM（ジェネラルマネージャー）でチームを指導する矢内浩さん。大切なのは勝利や技術だけではなく、「相手の気持ちを考えること」だと

言います。「パスをするときには相手があります。相手がどのように受け取ればその後、動きやすいのかと、相手の気持ちを考えることを学ぶことができるんです」と矢内さん。子どもたちにハンドボールの楽しさを伝え、実感してもらうことを目的にしていると言います。

オリンピック選手誕生へ

現役時代は全日本代表として活躍した矢内さんがめざす未来。「将来的には今回参加している小学生の中から、大崎OSOLの選手として所属し、日本代表としてオリンピックや世界で戦ってくれる選手が育ってくれればと思います。」

日本を代表する電気メーカー



川越街道（国道254号線）の三芳町役場入口の信号交差点脇に位置する大崎電気。電力量計などを製造販売し今年で創設100年。昭和35年（1960年）に当時社長、渡邊和美氏が会社の福利厚生面の充実を目的に、男子ハンドボール部を創設したことがきっかけで始まったハンドボールの歴史。日本リーグ3回、全日本総合12回、全日本実業団は不滅の10連覇を含む15回、新設の全日本社会人で2回、国民体育大会も21回の優勝を飾るなど、常に日本ハンドボール界をリードしてきました。

主力製品

日常でよく目にする電力量計。そのほとんどは町内企業の大崎電気工業で作られています。

